

肌の色と服地色との2色配色の見え

—夏の調査をもとに—

星野裕之・太田理代*・金常真利*

Appearance of Two-Color Combinations
with Skin-Colors and Clothes-Colors in Summer

Hiroshi HOSHINO, Riyo OHTA and Mari KANETSUNE

(Received September 28, 2007)

1. はじめに

服の色を決める際に自分に似合う色というものを客観的に意識したことがあるだろうか。あながち好きな色を選びがちではないだろうか。好きな色の服を買ったが自分には似合っていないかったことや、自分では思っても見なかった色を他人に良いと言われた経験が誰にでもあるのではないだろうか。

似合う色というのは、肌の色と合っている、肌の色がきれいに見える色とされており、これは肌の色が明るく見える場合である。一般に、肌の色が明るく見える配色というのは、対比効果により服地の色が肌の色より暗い場合であるとされている。

また、最近パーソナルカラーという言葉を目にするようになった。パーソナルカラーとは、各個人のもつ固有の色であり、自分に似合う色と共通するものがある。そこには肌の色との調和が1つの要素と考えられる。そのような観点から、肌の色と服地色との2色配色に着目し、パーソナルカラーの一端を知る手がかりとするため、平成16年12月に、肌の色と服地色のサンプルを作製し、本学女子学生を対象に視感判定実験を行った¹⁾。そこでは、一般に言われているように、被験者は対比効果により肌の色と服地色の組み合わせを捉えていると予想したが、分析した結果、被験者は肌の色と服地色を対比効果でも捉えているが、それのみではなく、当然ながらとして色から受けるイメージ（感情効果）も1つの要因として影響していることを示唆した。

そこで本実験では、感情効果に影響を及ぼすと考えられる季節感に着目し、平成16年12月と同様の視感判定実験を平成17年7月に行い、肌の色と服地色の2色配色の捉え方（見えの効果）について、季節の影響を検討した。

2. 視感実験

2. 1. 実験の概要

前回12月の視感実験¹⁾において、色票（平面サンプル）による2色配色（実験Ⅰ）、顔なしマネキンと布地（立体サンプル）による2色配色（実験Ⅱ）、顔ありマネキンと布地（立体サ

*山口大学教育学部卒業生

ンプル) による2色配色(実験Ⅲ)の3通りの提示方法で行ったが、実験Ⅱと実験Ⅲの結果に明確な違いがなかったため、今回は実験Ⅰと実験Ⅲの2通りの提示方法で行うこととした。

2. 2. 実験準備

前回12月(以下、冬調査と記す)の視感実験に使用した色票、マネキン、布地をそのまま用いた。つまり、肌の色としてオークル系の3色²⁾(以下、色白、中黒、色黒と記す)を、服地色として赤、黄、緑、青、紫の5色相それぞれに、PCCS トーン区分の概念を参考にしながら、pale、soft、vivid、darkの4トーンおよび白、灰、黒の無彩色の計23色を設定した。色票、マネキンについては、なるべく設定色に対して $\Delta E^* < 3$ になるように調色、塗布した。布地については、設定色になるべく近い染色綿布(SCOTDIC 2300 COTTON, 研彩館インターナショナル)を購入した。表1に服地色を、表2に肌の色をそれぞれ分光色差計(NF777, 日本電色工業)で測色したマンセル値を示す。なお、 $L^*a^*b^*$ 値については前報¹⁾のとおりである。

表1. 服地色の測色値

服地色	布 地			布地色用色票		
	マンセル測色値			マンセル測色値		
	H	V	C	H	V	C
赤 pale	6.2 R	8.0	/ 2.0	8.6 RP	8.0	/ 3.0
赤 soft	4.5 R	6.0	/ 6.2	4.8 R	6.4	/ 6.0
赤 vivid	4.8 R	4.5	/ 11.6	4.3 R	4.5	/ 10.3
赤 dark	6.7 R	2.7	/ 3.4	4.1 R	3.1	/ 3.5
黄 pale	4.7 Y	8.4	/ 2.7	4.6 Y	8.4	/ 3.3
黄 soft	4.6 Y	7.5	/ 5.1	5.5 Y	7.6	/ 5.6
黄 vivid	4.9 Y	8.0	/ 10.3	3.6 Y	8.5	/ 10.9
黄 dark	4.9 Y	4.7	/ 4.9	4.4 Y	5.1	/ 5.1
緑 pale	4.1 G	8.4	/ 1.6	6.2 G	8.3	/ 2.3
緑 soft	4.4 G	6.5	/ 5.4	5.1 G	6.4	/ 5.7
緑 vivid	3.9 G	5.3	/ 8.8	5.2 G	5.8	/ 10.6
緑 dark	3.5 G	3.2	/ 3.2	7.3 G	3.5	/ 3.7
青 pale	4.4 PB	8.0	/ 2.4	1.8 PB	8.1	/ 2.5
青 soft	4.6 PB	5.4	/ 3.8	2.4 PB	5.3	/ 4.3
青 vivid	4.0 PB	3.5	/ 9.3	2.9 PB	4.0	/ 9.8
青 dark	1.6 PB	2.2	/ 2.6	2.5 PB	2.7	/ 2.2
紫 pale	8.5 P	8.0	/ 1.5	9.2 P	8.5	/ 1.4
紫 soft	5.6 P	5.1	/ 4.8	6.1 P	5.4	/ 5.6
紫 vivid	4.6 P	3.8	/ 9.2	4.7 P	3.9	/ 8.9
紫 dark	4.6 P	2.8	/ 3.5	3.7 P	2.9	/ 4.7
白 White	6.6 P	9.0	/ 0.3	4.3 G	9.7	/ 0.3
灰 Gray	N	5.8		3.8 PB	5.9	/ 2.0
黒 Black	2.4 G	1.8	/ 0.8	5.2 PB	1.7	/ 0.4

表2. 肌の色の測色値

肌の色	マネキン塗布色			肌の色用色票		
	マンセル測色値			マンセル測色値		
	H	V	C	H	V	C
ア. 色白	8.8 YR	8.5	/ 4.3	7.0 YR	8.0	/ 4.4
イ. 中黒	6.3 YR	7.2	/ 5.6	4.0 YR	6.9	/ 5.3
ウ. 色黒	7.6 YR	6.2	/ 4.4	5.0 YR	5.8	/ 4.4

服地色として購入した布地については、先ほど述べたように、なるべくPCCS トーン区分に近い色を選んだが、元々PCCS に準じた製品ではないため、本報で述べているトーン名は便宜上の呼び名と認識してほしい。特に各色相とも vivid と記してある布地は、どちらかと言えば、strong トーンに近いマンセル値であったが、本報では vivid のまま記すことにする。また、マネキンおよび色票の肌の色についても、なるべく設定色（色白：7.5YR8/3，中黒：7.5YR7/4，色黒：7.5YR6/4）²⁾ になるよう努めたが（実際に ΔE^* は3未満に収まっている）、色白および中黒の彩度値がやや高めであった。しかし、冬調査との比較を考え、そのまま使用することにした。

本報では肌の色と服地色との関係を主に見るため、対比効果が重要な役割を果たすと考えられる。そこで、図1に各色相、トーンごとに布地色の測色マンセル値とマネキン肌色のそれとの明度差（マンセル ΔV ）および彩度差（マンセル ΔC ）を示す。ここで、横軸の p、sf、v および dk は、それぞれ pale、soft、vivid および dark トーンを表す。このグラフで、明度差が負の値のものは、服地色が肌の色より低明度であることを表し、明度対比により、肌の色が明るく見える（明るく感じる）服地色であり、彩度差が負のものは、肌の色より低彩度の服地色で、彩度対比により、肌の色が実際より映えて見える（映えているように感じる）服地色である。

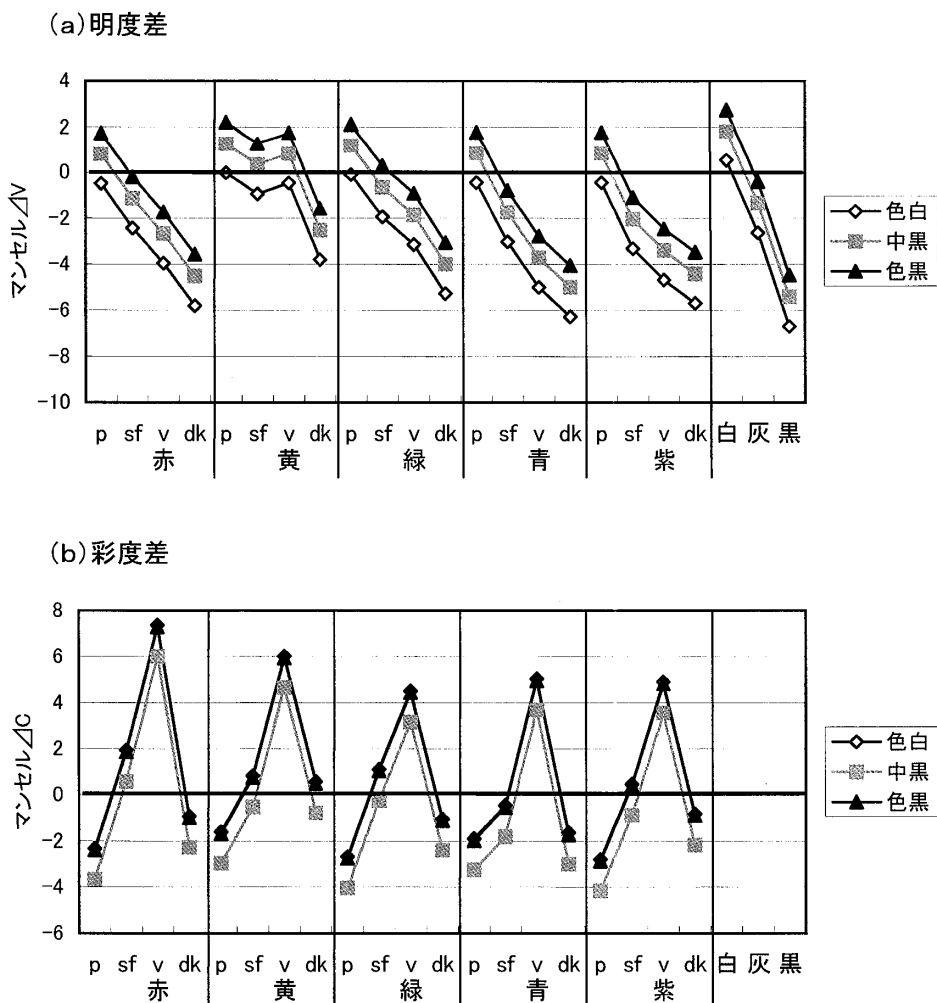


図1. 布地色とマネキン肌色との明度差・彩度差

2. 3. 視感実験方法

被験者は本学女子学生70名で、平成17年7月19日から29日の11日間、10時30分から16時の間に行った。

実施場所、アンケート質問紙、実施手順については前回12月と同様の方法をとった。質問紙項目、実施手順等の詳細は前報¹⁾を参照されたい。

3. 結果と考察

3. 1. 肌の色に合っていると感じられる服地色

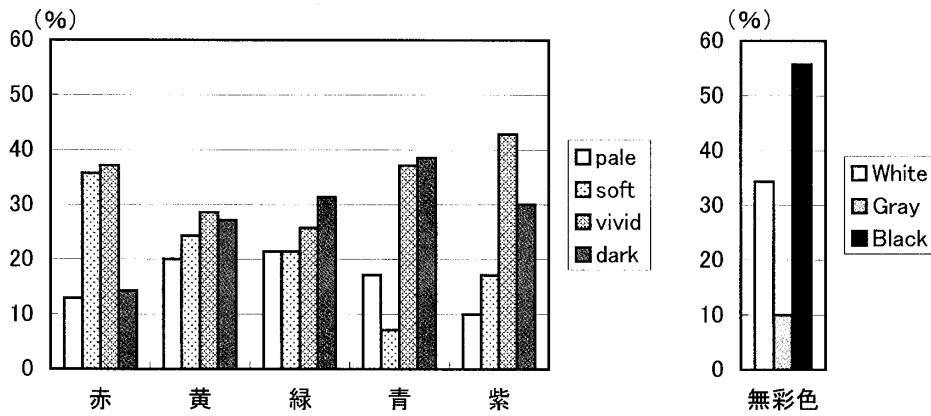
前回同様、まず初めに「肌の色と合っていると感じる組み合わせ」に順位をつけ、選んでもらった。1位として最も多く選ばれたトーンは、4トーンの中で肌の色と合っていると感じる服地色とし、4位として最も多く選ばれたトーンは、選ばれたトーンの最下位を示し、肌の色と合わないと感じる服地色とする。1位と4位を比較し、肌の色と調和が取れていると感じられるトーンを見ることとする。

7月に行った視感実験（以下、夏調査と記す）のうち、「肌の色と合っていると感じる組み合わせ」の1位に選ばれたトーンを図2に示す。このグラフは実験Ⅲの顔ありマネキンにおいて、肌の色別に各色相ごとに選ばれた服地色のトーンを人数%で示したものである。実験Ⅲは最も人に近いサンプルとして設定したので、この結果を取り上げ見ていくこととする。

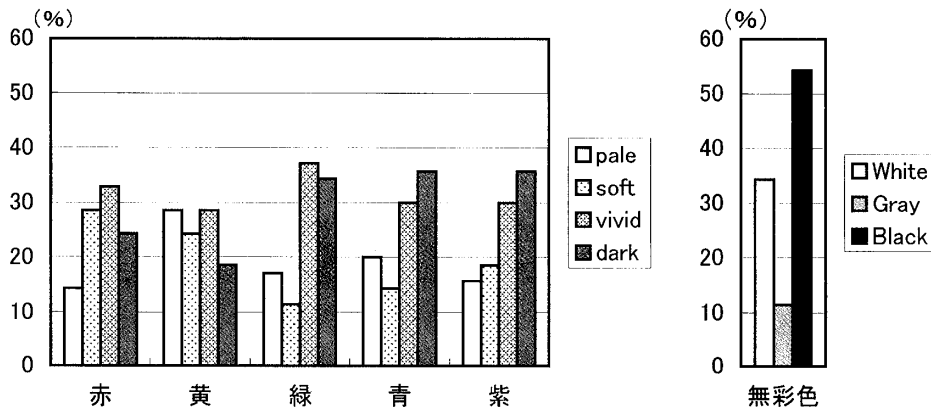
このグラフから各肌の色ごとに一番多く選ばれたトーンを見ていくと、赤では vivid または dark（冬調査では dark または vivid）が、最も肌の色に合っていると感じられる服地色であった。図1から、vivid トーンは色白および中黒の肌色より低明度、高彩度で、dark トーンは色黒の肌色より低明度、ほぼ同彩度である。また、色白においては soft トーン（色白より低明度・高彩度）の選択率も高い。同様に、黄では vivid（色白より同明度・高彩度、中黒・色黒より高明度・高彩度）または pale（中黒・色黒より高明度・低彩度）（冬調査：pale）、緑では dark（全肌色より低明度・やや低彩度）または vivid（中黒より低明度・高彩度）（冬調査：dark）、青では dark（全肌色より低明度・低彩度）または vivid（色白より低明度・高彩度）（冬調査：dark）、紫では vivid（色白・色黒より低明度・高彩度）または dark（中黒・色黒より低明度・同彩度）（冬調査：dark または vivid）、無彩色では Black（低明度）（冬調査：Black）が最も肌の色に合っていると感じられる服地色であることがわかる。冬調査では、黄色を除いて、主に肌の色より明度が最も低い dark トーンが多く選ばれ、明度対比が優勢であり、黄色においては、肌の色より彩度の低い pale トーンが選ばれ、明度対比よりも彩度対比が優勢であることが示唆された。今回7月の夏調査でも基本的には冬調査に類似した結果であったが、vivid トーンの選択率が多くなっていることが興味を引く。この vivid トーンは、肌の色より低明度であるが（黄色のみ高明度）、彩度はかなり高いトーンである。なお、実験Ⅰにおいても概ね同様の結果であった。

図3は、「肌の色と合っていると感じる組み合わせ」の4位に選ばれたトーンをグラフにしたものである。このグラフも同様に実験Ⅲの顔ありマネキンにおいて、肌の色別に色相ごとに選ばれたトーンを示したものである。このグラフからわかるように、赤では pale（色白より同明度・低彩度、中黒・色黒より高明度・低彩度）、soft（中黒より低明度・同彩度）（冬調査：vivid、pale）、黄では dark（中黒・色黒より低明度・同彩度）、vivid（色白より同明度・高彩度）（冬調査：vivid）、緑では pale（色白より同明度・低彩度、中黒・色黒より高明度・低彩度）（冬調査：pale）、青では soft（色白・色黒より低明度・同彩度）、pale（中黒・色黒より

(a) 肌の色: ア.色白



(b) 肌の色: イ.中黒



(c) 肌の色: ウ.色黒

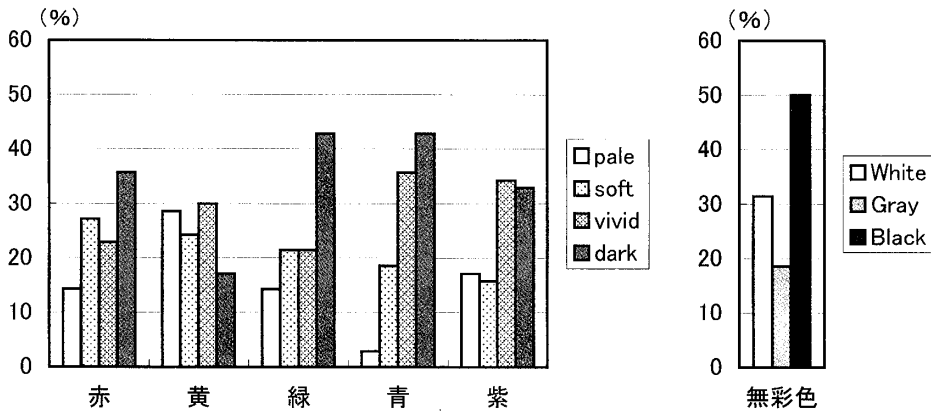
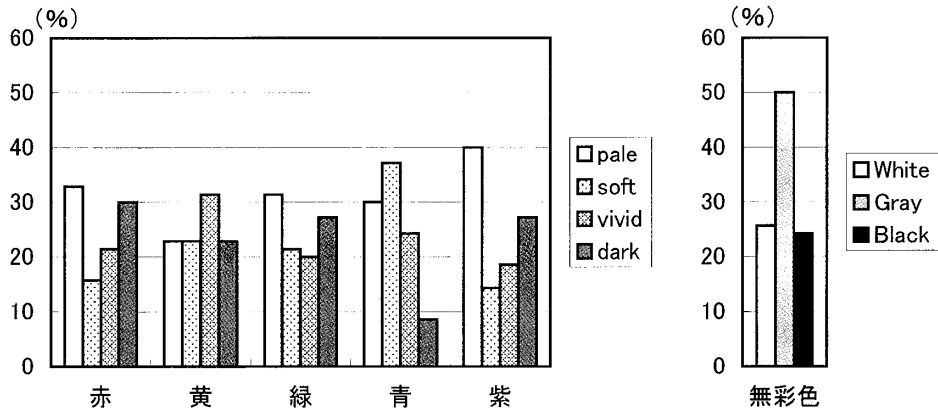


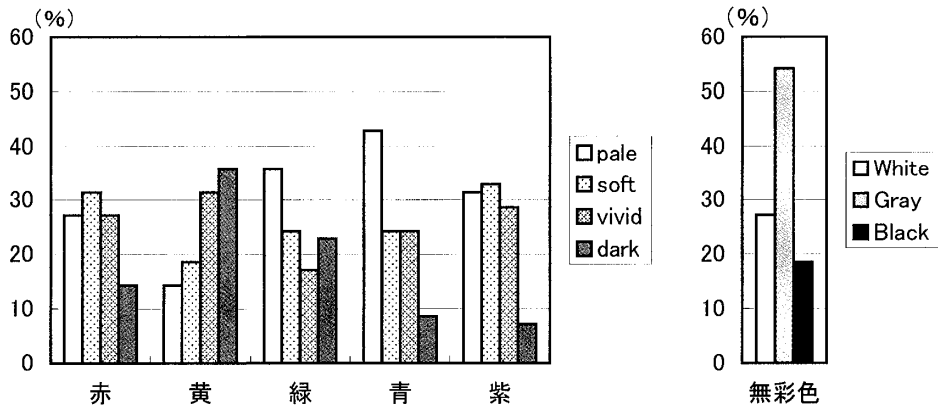
図2. 問1「肌の色に合っている」1位に選ばれたトーンの割合 (実験Ⅲ、夏調査)

高明度・低彩度) (冬調査: soft、pale、vivid)、紫では pale (色白より同明度・低彩度、中黒・色黒より高明度・低彩度)、soft (中黒より低明度・同彩度) (冬調査: pale、vivid)、無彩色では Gray (低明度) (冬調査: Gray) が、最も肌の色に合っていないと感じられる配色であることがわかった。実験Ⅰも類似の結果であった。

(a) 肌の色: ア色白



(b) 肌の色: イ中黒



(c) 肌の色: ウ色黒

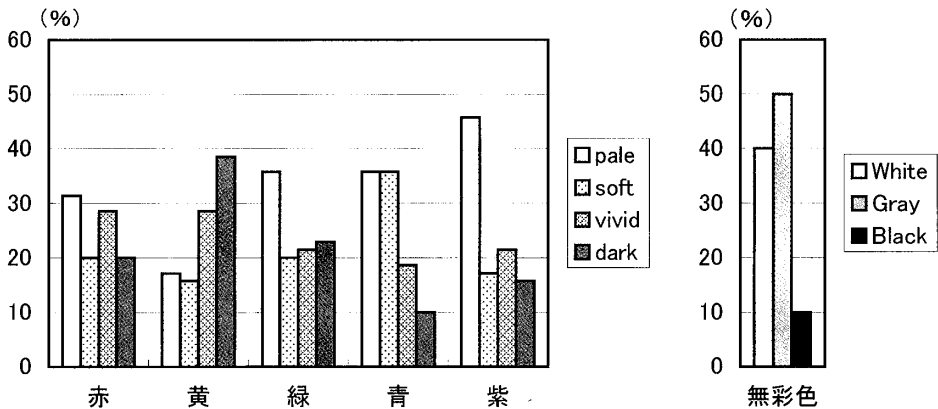


図3. 問1「肌の色に合っている」4位に選ばれたトーンの割合 (実験Ⅲ、夏調査)

これらのグラフより、冬調査結果同様、やはり肌の色より低明度または低彩度のトーン、あるいは低明度かつ低彩度のトーンが肌の色に合っている色として選ばれ、肌の色より高明度または高彩度、あるいは肌の色と同程度の明度か同程度の彩度のものが肌の色に合っていない色として選ばれた。これらの結果は基本的には視覚効果の一種である対比効果が働いていると言え

る。ただし、今回の夏調査では vivid トーンも多く選ばれた結果となったが、これは対比効果により肌の色はくすんで見えるため、不健康な顔色に見られてしまうことになるが、夏の季節感から服地色に対するイメージ（感情効果）がかなりの重みを占めたためと考えられる。また、4位として肌の色と同程度の明度あるいは彩度のトーンも選ばれたが、これは明度差、彩度差がないために、対比効果が起こりにくく、ぼんやりした印象を与えるためと考えられる。

このことについて全体の傾向を見るために、 $L^*a^*b^*$ 表色系を用い、肌の色と服地色との明度差 ΔL^* および彩度差 ΔC^* を算出し、次式のように各色相ごと、各サンプルごとに、それぞれの平均を算出した。

$$\Delta L^*_k = L^*_{k\text{服地色}} - L^*_{\text{肌の色}} \quad \overline{\Delta L^*} = (\sum_k \Delta L^*_k \times n_k) / N \quad (1)$$

$$\Delta C^*_k = C^*_{k\text{服地色}} - C^*_{\text{肌の色}} \quad \overline{\Delta C^*} = (\sum_k \Delta C^*_k \times n_k) / N \quad (2)$$

ここで、 k は各色相ごとにある4つのトーン、 n_k はそのトーンを選んだ人数、 N は総人数を示す。これらの式からわかるように、明度差あるいは彩度差が負の値であれば、服地色の方が肌の色より低明度あるいは低彩度であることをそれぞれ示す。

式(1)を用いて、「肌の色と合っていると感じる組み合わせ」の1位および4位について、肌の色と服地色との明度差の平均を、冬調査の結果と併せて示したのが図4である。冬調査、夏調査とも黄色は例外だが、4位より1位の方がより低明度の服地色が選ばれていることがわかる。このことから、被験者は明度対比により肌の色が明るく見えるように、より低明度の服地色が良いと感じていることがわかった。黄色については先に彩度差について述べてから考察する。

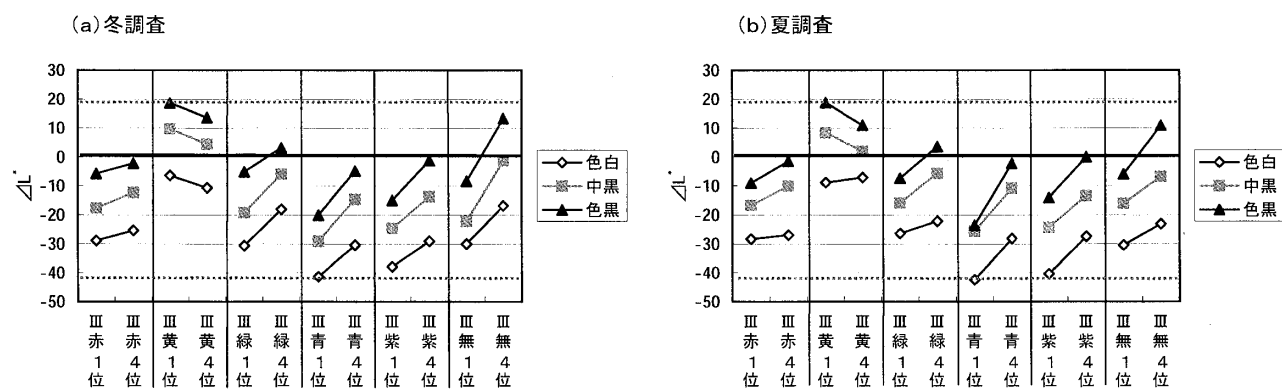


図4. 「肌の色に合っている」で選ばれたトーンと肌の色との明度差の平均（実験Ⅲ）

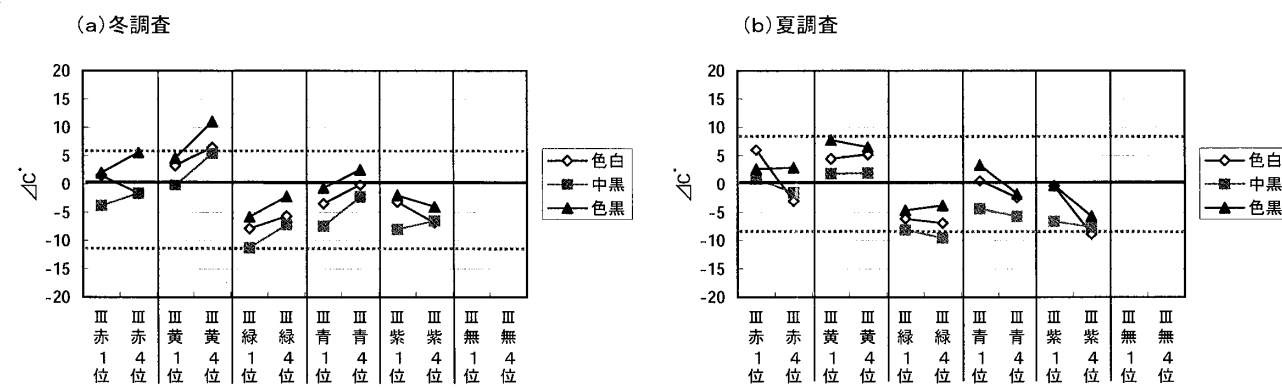


図5. 「肌の色に合っている」で選ばれたトーンと肌の色との彩度差の平均（実験Ⅲ）

図5は、「肌と合っていると感じる組み合わせ」において、1位と4位の肌の色と服地色との彩度差を式(2)に従って算出したものを図4と同様に冬調査結果とともにグラフにしたものである。1位と4位を比較してみると、明度差ほど大きな差はないが、全体として、冬調査の結果では、1位の方が4位に比べて、より低彩度の服地色が選ばれたのに対し、夏調査では1位の方がより高彩度のものが選ばれた結果となった。これは、夏調査の場合、夏という季節感から1位に vivid トーンを選ぶ人が多かったことが要因である。一方、冬調査の場合は、たまたま冬のイメージに合っただけなのかもしれないが、対比効果により、肌の色が服地色より明るく、映えて見える組み合わせを1位として選択したと思われる。また、冬調査と夏調査それぞれに1位のプロットの範囲を点線で囲むと、夏調査の方が冬調査より高彩度の服地色を選んでいたことがわかる。明度差のグラフ(図4)では、1位のプロットの範囲が冬調査、夏調査ともほぼ同じであることも考え合わせると、冬、夏という季節感が服地色の彩度に影響を及ぼしたと考えられる。

黄色については、図4より冬調査、夏調査とも1位の方が高明度で4位の方がそれより低明度と右下がりのプロットとなったが、これは、黄色自体が他の色と同じトーンであっても明度が高く(図1参照)、今回の4つのトーンのうち、肌の色より明らかに低明度なのは dark トーンのみで、他のトーンは高明度または同明度であるためである。したがって、明度対比よりも彩度対比の効果が優勢となり、1位として肌の色より高明度であるが、低彩度の pale トーンを、4位として肌の色より高明度・高彩度である vivid トーンを選んだ人が多かった。また、図5より冬調査では1位から4位へ右上がりのプロットに対し、夏では1位と4位がほぼ同程度の彩度差か、あるいは右下がりのプロットになったが、これは季節感に関係なく1位として pale (肌の色より低彩度) を、4位として vivid (肌の色より高彩度) を選ぶ人がいるなかで、夏という季節感を感じて1位として vivid トーンを、4位として dark トーン(色白を除く)を選ぶ人の混在率が増加したためである(図2、3参照)。明度対比の観点からみると、dark トーンは3種の肌の色より低明度、ほぼ同彩度であり、理屈のうえでは、肌の色が明るく見えるので、色白に対しては特に他の肌色より明度差が大きいため、1位として選ぶ人が多かった(図2)。しかしながら、全体的には冬調査、夏調査とも dark トーンが4位して選ばれる傾向にあることは、対比効果だけではなく、色の持つイメージも関与していることを示唆している。このように季節感からくる感情効果も影響しているが、対比効果に限定すれば、どちらかといえば、黄色は彩度対比が優勢になるのではないかと考えられる。

3. 2. 冬調査と夏調査との比較から見る肌の色に合う服地色

前項では各色相ごとに最も多く選ばれたトーンを見てきたが、この項では各色相ごとに冬調査結果に対する夏調査結果のトーンを選択率の増減を見ていく。

図6は夏調査における「肌の色に合っていると感じる組み合わせ」の1位に選ばれたトーンの人数%(図2)から冬調査の人数%を差し引いた増減を表したものである。ここで、正の値は冬調査結果に比べ夏調査結果の方が高い選択率であったことを表し、負の値は冬調査結果に比べ夏調査結果の方が低い選択率、言い換えれば、夏調査結果より冬調査結果の方が高い選択率であったことを表す。この図より全体的に夏に vivid トーンが選ばれる傾向にあることがわかる。また、肌の色が色白で服地色が赤、黄、緑の場合、最も多く選ばれたトーンではないが、冬調査に比べ夏調査で soft トーンを選択率が、肌の色が色黒で服地色が赤、黄、緑、青の場合、pale トーンが冬調査で多く選ばれていたことは興味を引く。これらについては、視覚効

果である対比効果だけで説明するのは難しく、季節感も含めた個々人の感情効果はかなり関与していると思われる。

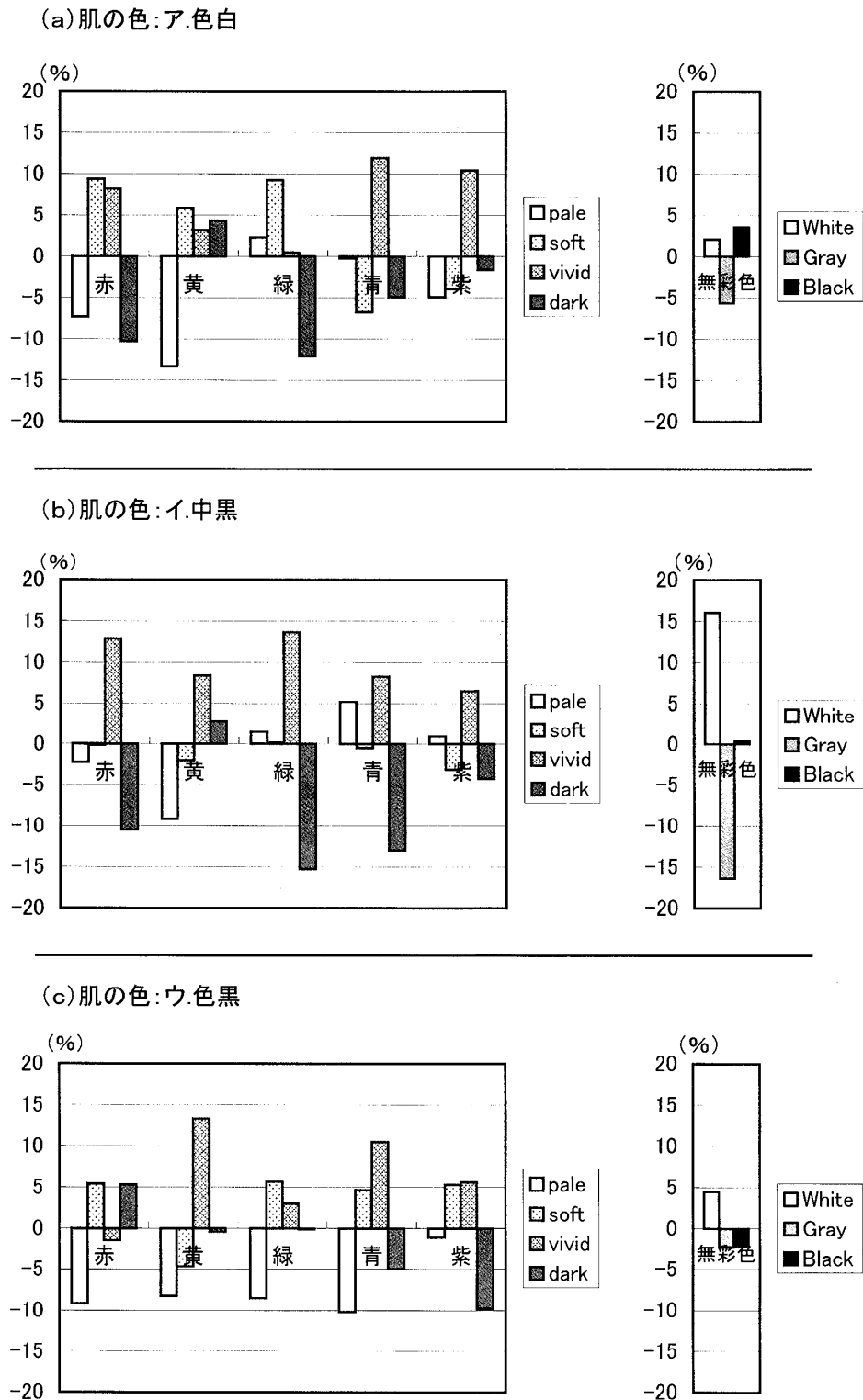


図6. 問1「肌の色に合っている」1位に選ばれたトーンの夏・冬の増減 (実験Ⅲ)

3. 3. 好きな組み合わせ

図7は、実験Ⅲの顔ありマネキンにおいて、問2「好きな組み合わせ」で選ばれたトーンを、肌の色別に各色相ごとの人数%で示したものである。このグラフから各肌の色ごとに一番多く選ばれたトーンを見ていくと、赤では soft（色白より低明度、やや高彩度）、vivid（中黒より低明度、高彩度）または dark（色黒より低明度、同彩度）（冬調査：soft、dark）、黄では pale（色白と同明度、低彩度、中黒・色黒より高明度、低彩度）、dark（色白より低明度、同彩度）または vivid（中黒より高明度、高彩度）（冬調査：pale、soft）、緑・青・紫色では冬調査同様 dark（全肌色より低明度、低彩度）、無彩色では Black（全肌色より低明度）が一番多く選ばれた。また、色白の緑・青・紫では、dark トーンとともに vivid トーン（色白より低明度、高彩度）も多く選ばれていることが興味を引く。このグラフから、もうひとつ気づくことは、緑・青・紫では選ばれたトーンに偏りがみられ、好みが特定のトーンに偏っているのに対し、赤、黄色では、どちらかといえば選ばれたトーンが分散しており、好みも分散しているのは、冬調査と同様の傾向であった。暖色系で選ばれたトーンが分散したのは、対比効果とは別にそれぞれのトーンの持つイメージが強く影響したためと考えられ、寒色系で好みも偏って集中したのは、トーンのイメージが共通し、同じ印象を受けるため、イメージではなく、対比効果が強く影響していると考えられる。

3. 4. 明るく見える・暗く見える組み合わせ

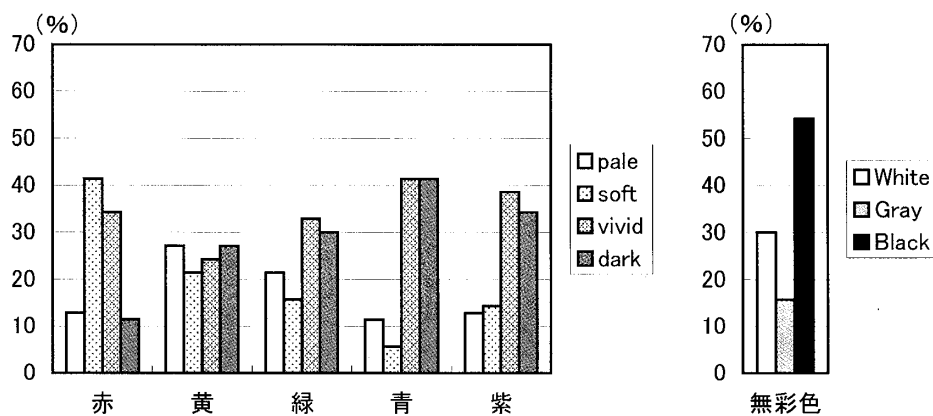
問3および問4では、肌の色が明るく見えるか暗く見えるかという視点で服の色を選んでいくかを調べるため、肌の色が明るく見える組み合わせを選んでもらった。まず問3「明るく見える組み合わせ」で選ばれたトーンの結果を人数%で示したものが図8で、実験Ⅲにおける結果である。有彩色すべてにおいて最も多く選ばれたのが pale で、次いで vivid、無彩色では White が圧倒的な多さで選ばれたのは冬調査と同様であった。また、明るく見える組み合わせの場合、提示サンプルによる違いが、肌の色が「色白」で見られた。その結果を表3に示す。この表は、各色相ごとに最も多く選ばれたトーンのみを示したものである。この表から、実験Ⅰでは明度対比により肌の色が明るく見える vivid と Black が選ばれたのに対し、実験Ⅲでは、pale と White が選ばれた。

これは平面と立体の違いで色の見えが変わったと考えられる。つまり、色票という平面では配色の関係のみで見られ対比効果が現れたのに対し、マネキンという曲面をもつ立体では陰影ができるので、色の見えが当然平面とは異なることとなり、サンプルから受ける印象が変わると考えられる。

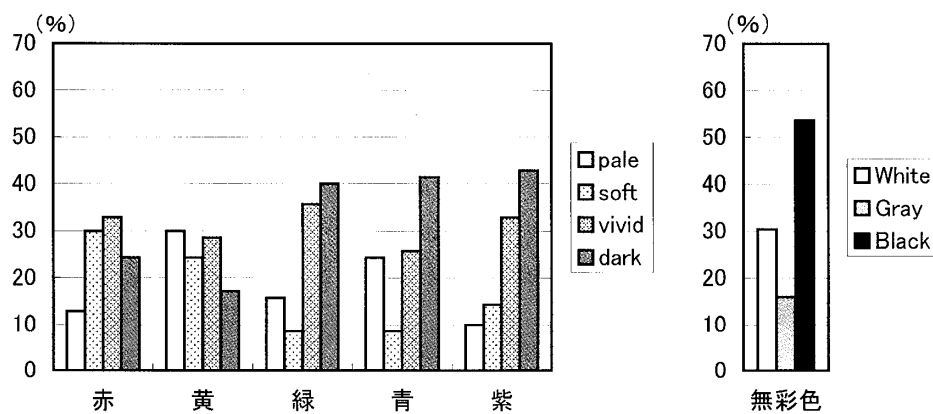
問4は、問3と同様の理由で、「肌の色が暗く見える組み合わせ」を選んでもらった。実験Ⅲにおける結果を図9に示す。有彩色では dark、無彩色では Gray が選ばれ、特に青色では soft も割合多く選ばれたのは冬調査と同様である。

一般に、肌の色より服地色の方が暗いトーンするとき肌の色が明るく見えるとされているので、問3の「肌の色が明るく見える組み合わせ」に対して、有彩色では vivid（黄色を除く）または dark、無彩色では Gray または Black が選ばれると予測されるが、今回の夏調査でも冬調査同様、有彩色では高明度である pale、無彩色でも高明度の White および低明度の Black が選ばれた。また、肌の色が暗く見える配色は、肌の色より服地色が明るいトーンのとときであるとされているので、問4の「肌の色が暗く見える組み合わせ」に対して、有彩色では pale、無彩色では White が選ばれると予測されるが、結果は有彩色では dark および soft、無彩色

(a) 肌の色: ア.色白



(b) 肌の色: イ.中黒



(c) 肌の色: ウ.色黒

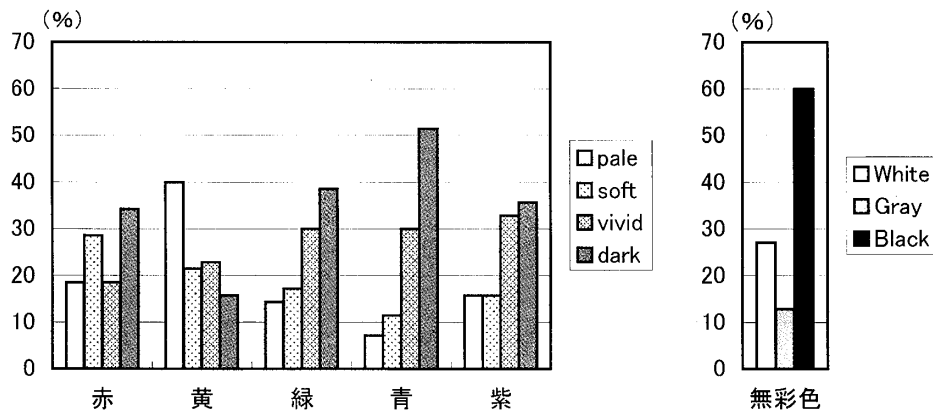
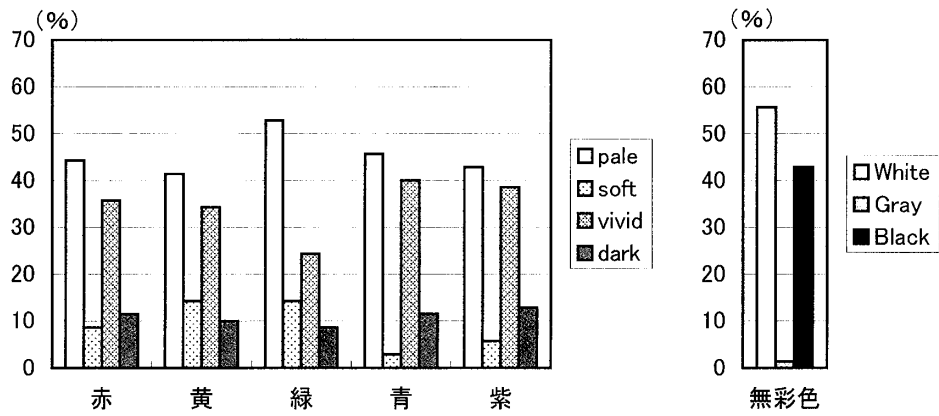


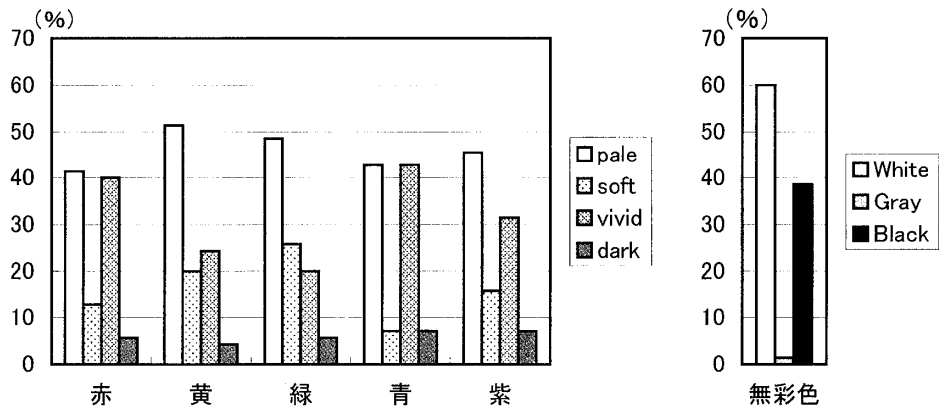
図7. 問2「好きな組み合わせ」で選ばれたトーンの割合 (実験Ⅲ、夏調査)

では Gray が選ばれた。そこで、「肌が明るく見える・暗く見える組み合わせ」で選ばれた服地色の全体傾向を見ていくことにする。

(a) 肌の色: ア.色白



(b) 肌の色: イ.中黒



(c) 肌の色: ウ.色黒

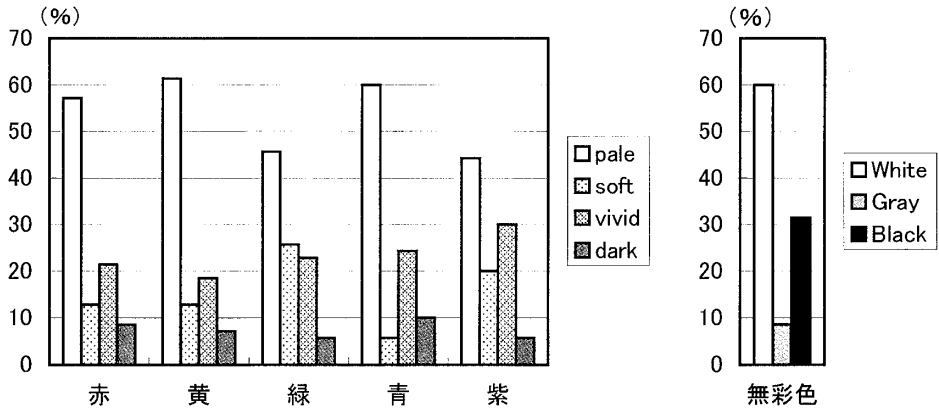
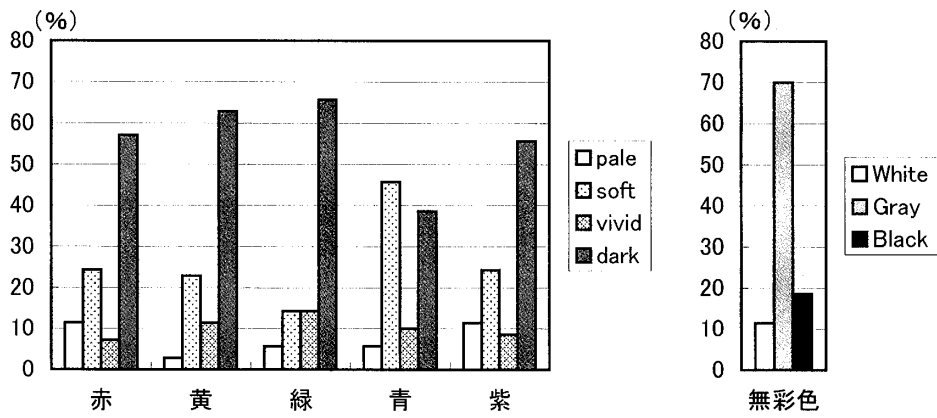
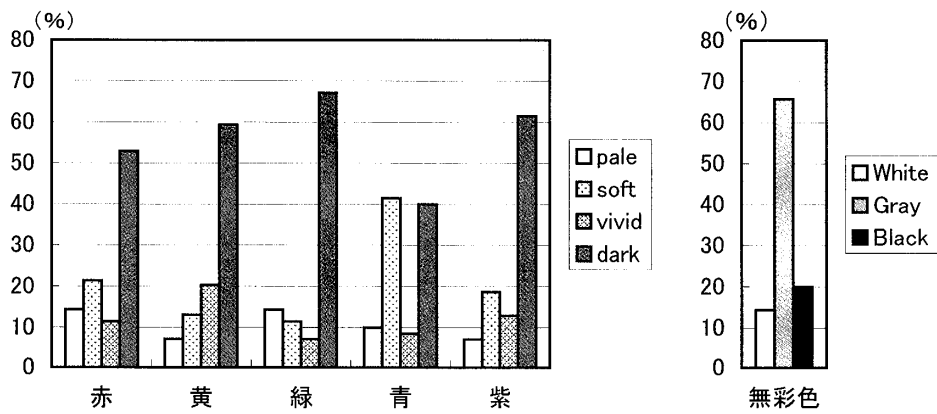


図8. 問3「明るい組み合わせ」で選ばれたトーンの割合 (実験Ⅲ、夏調査)

(a) 肌の色: ア色白



(b) 肌の色: イ中黒



(c) 肌の色: ウ色黒

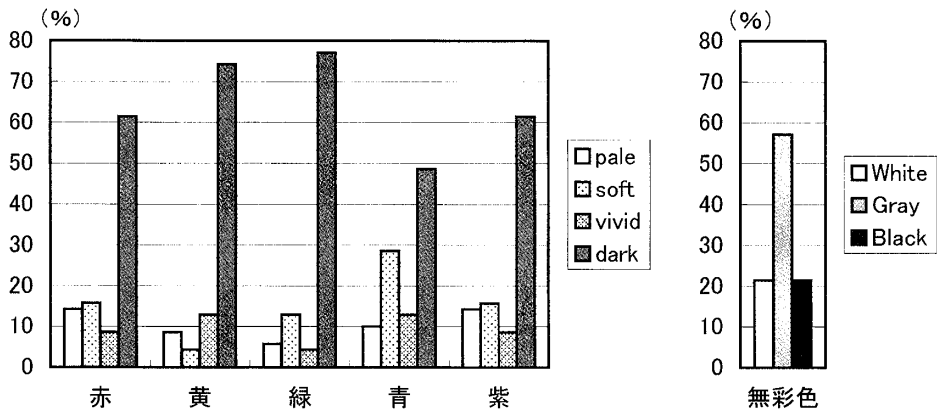


図9. 問4「暗い組み合わせ」で選ばれたトーンの割合 (実験Ⅲ、夏調査)

表3. 問3「肌色を明るいと感ずる組み合わせ」で一番多く選ばれたトーン

布色	肌色	ア (色白)	
	実験	I	III
赤	トーン	vivid	pale
	人数	23	31
	有効人数	70	70
	%	32.9	44.3
黄	トーン	vivid	pale
	人数	27	29
	有効人数	70	70
	%	38.6	41.4
緑	トーン	vivid	pale
	人数	35	37
	有効人数	70	70
	%	50.0	52.9
青	トーン	vivid	pale
	人数	34	32
	有効人数	70	70
	%	48.6	45.7
紫	トーン	vivid	pale
	人数	31	30
	有効人数	70	70
	%	44.3	42.9
無彩色	トーン	Black	White
	人数	40	39
	有効人数	70	70
	%	57.1	55.7

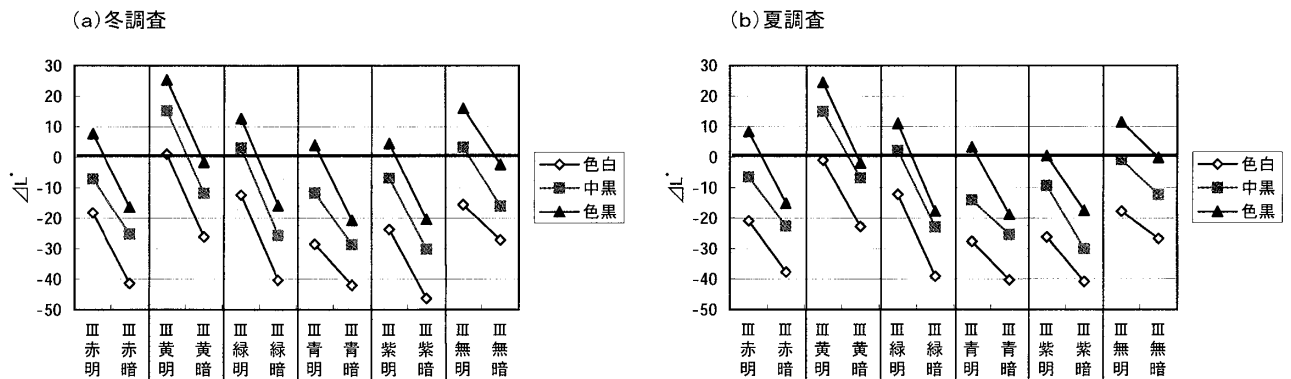


図10. 「肌の色が明るく見える・暗く見える組み合わせ」で選ばれたトーンと肌の色との明度差の平均 (実験Ⅲ)

図10は肌が明るく見える、あるいは暗く見える組み合わせで選ばれたトーンを式(1)に従って算出した明度差の平均を示したものである。肌の色より服地色の方が低明度の場合、負の値を示す。(a) 冬調査、(b) 夏調査とも、明るく見える組み合わせの方が高明度の服地色を、暗く見える組み合わせの方が低明度の服地色が選ばれた。設問はあくまで「肌の色が明るく、あるいは暗く見える組み合わせ」を問うているので、視覚の対比効果により、問3ではより暗いトーンの服地色を、問4ではより暗いトーンの服地色が選ばれると予想したが、逆の結果と

なった。このことは、「明るく見える組み合わせ」という明暗を意識させる設問にしたことで、被験者は提示サンプル全体の雰囲気に影響を与える服地の色という観点で評価したと考えられ、前報に述べたとおりである。

4. まとめ

今回の視感実験では、12月に行った冬調査と同様の調査を夏に行い、肌の色と服地色との配色において季節による違いがどのように出るかを、本学女子学生を対象として調べた。

まず、「肌の色に合う組み合わせ」および「好きな組み合わせ」については、基本的には冬調査と同様に、低明度あるいは低彩度のトーンが選ばれたのであるが、夏という季節感から vivid トーンを選ぶ人が増えた。一方、冬調査同様、「肌が明るく見える組み合わせ」で高明度のトーンが、「肌が暗く見える組み合わせ」で低明度のトーンがそれぞれ選ばれた。このことは、「似合う組み合わせ」および「好きな組み合わせ」という設問に対しては、無意識のうちに対比効果が働くのに対して、あえて「明るく見える組み合わせ」という、被験者に明暗を意識させる設問にすると、提示サンプル全体の雰囲気に影響を与える服地の色という観点で評価すると考えられる。

また、色票の2色配色（平面）、マネキンに布地（立体）という提示サンプルの違いにより、問3の「明るく見える組み合わせ」において、肌の色が色白の場合に選択されるトーンに違いが現れ、色票では vivid および黒が、マネキンに布地では pale および白が最も多く選ばれた。

参考文献

- 1) 星野裕之他, 山口大学教育学部研究論叢, 第55巻, 第3部, 153-169 (2005)
- 2) ファッションカラー編集部編「おしゃれな色の選び方」, 日本色研事業, 1999
- 3) 財団法人日本色彩研究所編「色彩ワンポイント8 色彩イメージと配色」, 日本規格協会, 1993